

木材業に着目した堀川の水辺空間利用の歴史的変遷

名古屋大学 学生会員〇 中川 晃太

名古屋大学 正会員 中村 晋一郎

1. はじめに

河川や運河などの水辺空間は都市における貴重な自然空間およびオープンスペースである。近年多くの都市で水辺空間の再生が進んでいる¹⁾。名古屋においても、中心部を流れる堀川について『堀川まちづくり構想』²⁾ (平成24年(2012))が発表されるなど、水辺空間を軸としたまちづくりの機運が高まっている。

名古屋堀川は、慶長15年(1610)名古屋城築城のための資材運搬用の運河として開削されて以降、港と都市部を繋ぐ物流の大動脈として機能してきた。特に木材については、木曽地方から運ばれた良質な檜をはじめ、各地から原木や製材が集まる木材の一大集積地であった。木材を介した人々の生業は、堀川の空間形成に深くかかわってきた。堀川において、沿線に材木店、製材所が建ち並び、水面に多くの丸太を浮かべているその風景は堀川の本風景であるともいえる。したがって今後の堀川再生の在り方を考える上で、木材に着目した空間利用の歴史的変遷を明らかにすることは極めて重要である。



図-1 昭和40年ごろの堀川³⁾

堀川の水辺空間に関する既往研究としては、堀川沿いの歴史的な建築物について報告したもの⁴⁾、堀川のコミュニティ空間を他地域と比較して分析したもの⁵⁾などがあるが、堀川における木材業のような水辺での生業に着目して水辺空間利用がどのように変化してきたかという点については、これまで考えられてこなかった。

したがって本研究では、堀川の木材業に着目して、木材業界を取り巻く状況が激変した戦後から現在に至るまでの時期に、水辺空間がどのように利用されてきたのか、また社会情勢の変化に伴って空間利用がどのように変わってきたのかを明らかにすることを目的とする。名古屋城付近の朝日橋から河口部までを対象とする。

2. 研究手法

本研究では、[1]木材を取り扱う事業所の個数と空間分布、[2]統計から見た堀川の情勢、[3]ヒアリング調査による空間利用状況の把握、それぞれについて歴史的な変遷を明らかにし比較することで空間利用の変化を明らかにする。[1]では資料が存在する1961年から現在に至るまでを対象とし、1961年から現在に至るまでの住宅地図から事業所を抽出し、およそ10年ごとに2万5千分の1地形図上にプロットして個数と空間分布の変化を追う。[2]では港湾統計などの資料から堀川の物流や航行の状況の変化を調査する。[3]では、現存する事業者に対してヒアリングを行い、堀川を生業の場としてきた人々の目線から見た水辺空間の利用とそして変化を考察する。

3. 結果

現時点で得られた結果を以下に述べる。

- ・昭和43年(1968)に西部木材港が開港し、さらに昭和55年(1980)に東海道本線貨物支線の末端の堀川口駅が廃止、昭和57年(1982)に白鳥駅が廃止されたのちの1980年代から90年代にかけて事業所数が激減している。木材入荷量との相関もあると思われる。

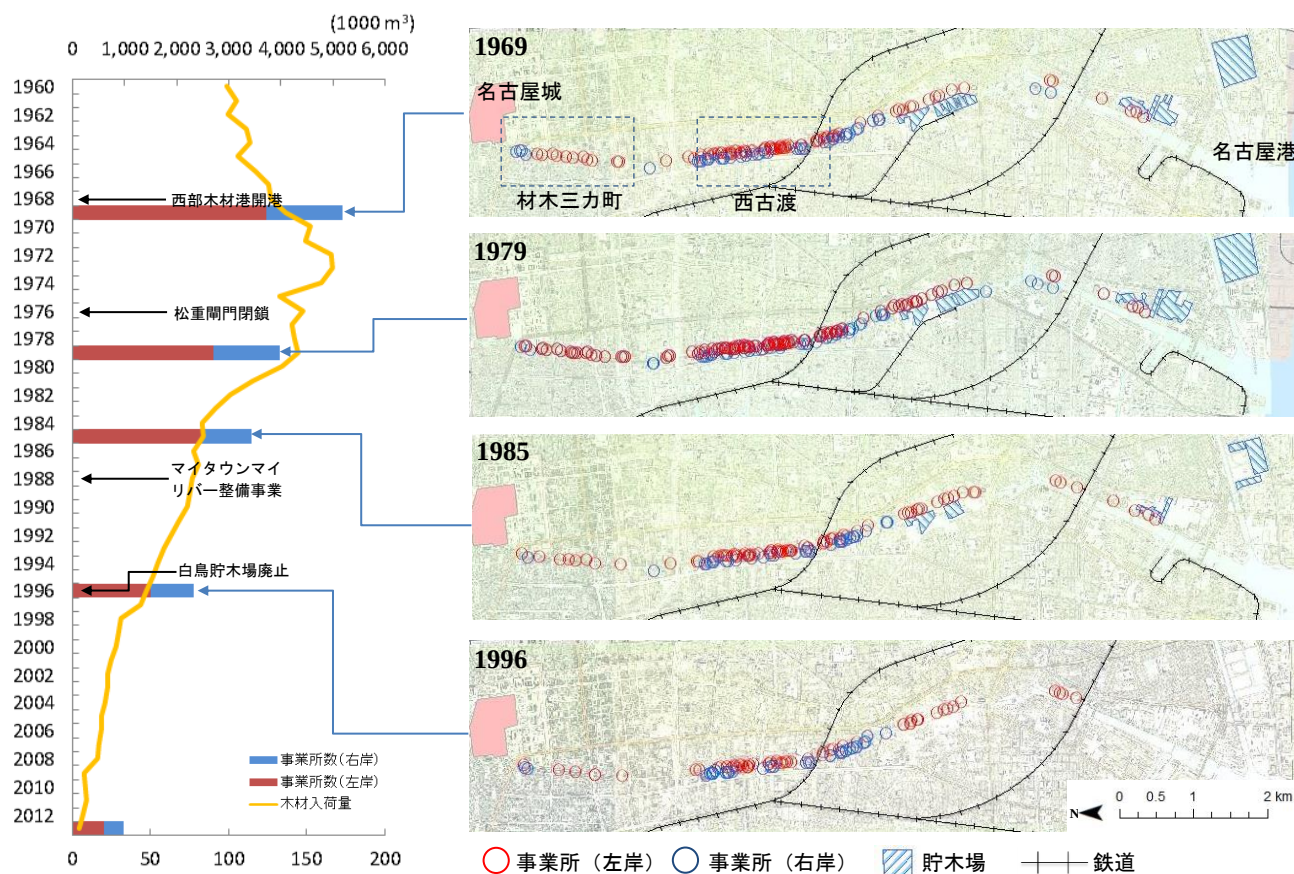


図-2 愛知県の木材入荷量と堀川沿いの木材業事業所の空間分布

- ・西古渡（中川区山王）が木材産業の中心地であり、現在でも事業所が残っている。かつて「材木三カ町」と呼ばれた元材木町、下材木町、上材木町ではこの時期既に衰退している。白鳥貯木場より下流の河口に近い部分では事業所は比較的少ない。
- ・全体的に、左岸に事業所が多く、旧材木三カ町では事業所はほとんど左岸にある。ただし西古渡では左右岸どちらにも多く残っている。

4. おわりに

木材業事業所の個数と空間分布の変遷を把握し示したことは一つの成果である。今後、他のデータを収集しそれぞれを比較し相関を考察するとともに、ヒアリングによって水辺空間の利用実態を明らかにし、それを空間断面図として示す予定である。

5. 参考文献・補注

- 1) ミズベリング, 日本橋での水辺再生研究会の活動, 韓国清溪川の再生事業など, 水辺空間に着目した事業が推進されている。
- 2) 名古屋市: 堀川まちづくり構想, 2012
- 3) 西別府順治: 名古屋港と三大運河, pp.22, 2011
- 4) 野口英一朗, 神谷昇司, 水野信太郎, 水野由美: 名古屋堀川沿いの研究, 日本建築学会東海支部研究報告第45号 pp.725-728, 2007
- 5) 佐藤圭二, 長尾将司, 石塚悠圭, 松山明: 名古屋堀川運河の景観と課題-名古屋都心空間の魅力の研究, 日本建築学会東海支部研究報告書, 506 第52号, pp.621-624, 2014